

全国に先駆けて

「白根市農業法人会」誕生

法人経営が増加

「休みが取れない」「収入が不安定」「老後の保障がない」「若い人、特に女性の発言力がない」。農業に魅力を感じなくなった人たちの言葉です。これらの問題を解決しなくては、若い人の農業離れはいつまでも続くでしょう。

人材確保が困難な近年、農業法人による経営が注目を集めています。農業法人とは、個人あるいは数戸の農家が集まって法人となった組織をいいます。農業法人では、始業・就業の時刻、休日、給料、退職金などの保障が、制度としてしっかりと確立されています。法人の構成員は、社会的な感覚で農業に従事することになります。

農業法人にはいろいろな形態があります(図)。今までは、養豚、鉢物の花木などの、農地を必要としない分野での法人化が中心でした。しかし近年、農地法などの関係法令が改正されたことで、稲作、果樹などの分野でも法人化が活発になっています。農業法人は全国的に増加傾向にあります。白根市内では既に七つの農場

が法人化。企業的感覚で活躍しています。

魅力ある職場環境

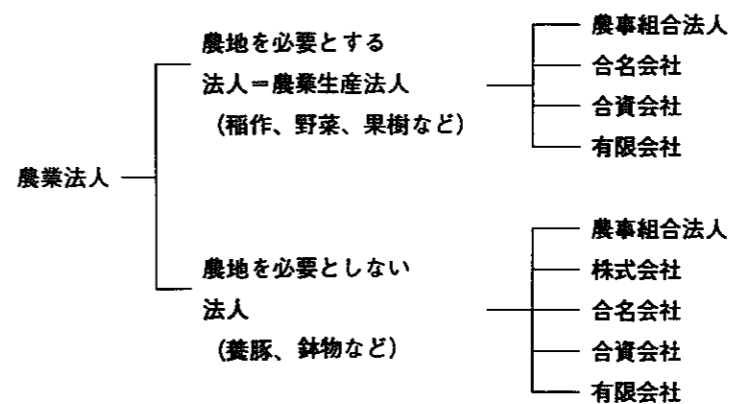
農業法人は会社です。従来の家族経営と比べ、次のようなメリットがあります。

まず、保障という面では、社会保障制度(社会保険、雇用保険)を適用できます。労働災害や定年後の心配をしないで、安心して労働ができます。

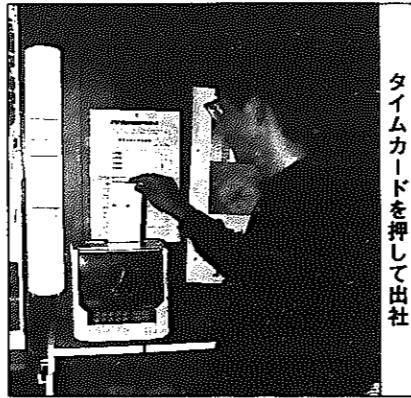
また、法人であることから決算書の作成が義務付けられているため、経営内容が明確になります。経営内容を分析、研究することにつながり、計画的な運営ができます。

そして何よりも大きなメリットは、構成員にやる気と自覚が出てくることです。組織的な経営ですから、各自の役割分担がはっきりと決められます。これにより若い人、特に女性の地位、役割を確立できます。いずれも従来の農業にはなかった考え方で、農業後継者だけでなく、農業に関係のない労働者にとっても魅力ある職場といえます。

図：農業法人の形態



経営はコンピューターで管理



タイムカードを押して出社



白根市農業法人会設立総会(7月30日 白根市役所)

コンピューターで計画的な生産

実際に法人化した農場の例をみてみましょう。

市内のある農業法人では、社員の労働時間をタイムレコーダーで管理しています。これにより年間の労働時間をコンピューターで分析。忙しい時期はパートを雇用して対応、暇な時期は他の農作物を作るなどの工夫をし、労働時間が年間を通じてなるべく均等になるよう配慮しています。このため社員が休暇を取りやすい状況ができています。

給料は毎月支給され、ボーナスもあります。社員は全員が社会保険に加入。労働災害に対する保障、定年後の保障がなされ、安心して働ける職場になっています。

経営面でもコンピューターを活用。各作目ごとの収益率を計算し、どの農産物をいつ取り入れるべきかを分析。計画的な生産で売り上げアップを図っています。

法人であるということで、安心して農地を任せられるなど社会的な信用が高く、兼業農家からの農作業の委託が増えています。

大切なのは経営努力

経営の法人化には、いろいろなメリットがありますが、反面、家族経営にはない問題もあります。まず設立のときには、一定の資本

金が必要です。法人化すれば、売り上げが悪くても、必ず一定の給料や資材費を支払わなければなりません。資本金が少ないと資金繰りに窮することになります。

また、経営者としての先見性、営業活動、地域とのかかわり、関係機関との連携も大切です。経理担当者を育成する必要もあります。

法人化したからといって、すぐにばら色の経営が約束されるわけではありません。法人のメリットを活用し、経営努力をしなければ、発展は望めません。

全国初の農業法人会

農業法人の歴史はまだまだ浅く、始まったばかりです。白根市でも法人化の動きが高まっていますが、法人化した農家も、これから法人化しようとする農家も、いろいろな問題に直面し、研究を重ねています。

このような中で白根市では、農業法人の経営管理の勉強会や情報交換を目的とした「農業法人会」が誕生。七月三十日、市役所で設立総会が開かれました。農業法人の組織化は全国でも初めてです。

同会には、市内の法人と近々法人化を目指す五グループと五個人が参加。定期的な研修会や先進法人の視察、会報の発行などの活動を予定しています。地域農業のけん引的役割を果たすものと期待されています。

夢のある産業へ

農業を取り巻く状況は厳しくなっています。けれどもそれに屈することなく、農業を安定した職業として確立しようとする農家の姿が、各地で見られるようになりました。今、農業は徐々に形態を変え、魅力ある産業へと生まれ変わろうとしています。農業を見る人の目も、確実に変わってきています。

ある農家の人は「一年間稼いだ成果を決算して息子に見せた。すると息子は「おやじがそんなに稼げるなら、おれはもっと稼げるよ」と言って、会社を辞めて農業を継ぐ気になった」と話します。

けれども、その人はこう語りました。「たとえどんなにうまくても、親が苦しむ姿を見れば、農業をやろうなんて絶対思わないですよ」と。農業を楽しむ気持ち、農業に熱中する姿にこそ、夢があるのでしょう。

